

## 研究計画概要

助成年度・種別	2026年度 若手研究助成
研究者	富永 京子
所属	立命館大学産業社会学部
研究テーマ	若年層の社会的孤立・逸脱を防ぐ自治型ネットワークの役割と課題
研究計画概要	<p>本研究は、若者や生活困窮者を対象とするシェルターにおいて課題となっている「管理」と「自治」の関係に着目し、地域協働型かつ非管理的な運営の可能性を検討するものである。近年、日本では自立援助ホームや無料低額宿泊所が増加しているが、これらの施設では利用者の生活を管理することで自立を支援する傾向が強く、かえって自律性の低下や社会的孤立、逸脱の助長といった逆機能も指摘されている。</p> <p>こうした課題に対し、海外では地域住民やボランティアと連携しながら、利用者自身も住まいづくりや活動運営に関わる「地域協働型・自治型シェルター」が注目されている。本研究は、その日本における先駆的事例として、札幌市の一般社団法人「Who Cares?」を対象に、参与観察とインタビュー調査を通じて実態を明らかにする。</p> <p>研究では、海外先行研究をもとに、①法的・制度的条件、②利用者の属性、③立地特性と移動手段、④建築物の特性、という4つの観点から分析枠組を構築し、日本の事例に適用する。これにより、海外事例との共通点・相違点を明らかにし、日本で地域協働型・自治型シェルターを展開する際の課題と条件を考察する。</p> <p>調査期間中は、月例会議や炊き出しへの参与観察を継続的に実施するとともに、利用者・運営者計20名程度への聞き取り調査を行う。あわせて、関連するシェルター研究、福祉社会学、都市空間論、セーフアースペース論などの文献を検討し、分析を深める。研究成果は国内外の学会で報告し、学術誌への投稿を通じて発信する予定である。</p> <p>本研究は、学術的には日本における自治型シェルター研究の基盤形成に寄与し、社会的には若者支援をめぐる管理的・閉鎖的なイメージを見直し、地域全体で若者の自立を支える新たな支援のあり方を提示することを目指す。</p>
選考委員からのコメント	<p>従来型のシェルターは、その管理が却って、被支援者の自立性を損ない、逆に社会的孤立感を深めているといった諸外国の研究成果を踏まえ、諸外国のような地域協働型・自治型シェルターの展開可能性を探る意欲的な研究である。諸外国の先行研究の分析枠組を用いた比較は容易でないとと思われるが、研究対象事例の特性を明確にし、参与観察・インタビュー調査の報告だけにとどまらない学術的な成果を期待する。</p>